



可
善

杏
根
可
善

五

中村俊定文庫
文庫 18
611
5





俳諧同答青根り翠巻し五



同門評判

浩と舎芳麻呂校之

一 同門れ中に對面を於人をもありまことせね人もあり
たうれとも數句俳諧のうゝあてその人をけりし
作をを編して奥より去るはとん秘ひをけり
あり

一 夏一先生の風雅を偏せきその名とてれとて一
実とていふ花はらあして今もハセりあり天てん正せい

しくうまればこそきあふよりて難く言つ
とるこやーすーかけらぬふ易作れ白公
りれども流形れ白きとくぬーさくく言
かゝるれ衣冠束帯れ西条の人拾女所れそそ
くー一殿さーわらふ柱めてき一人能人や
移居所ー拾女所れとりを御ーわーかけら
師了流形月堂を經るふあふ^{あつた}中善門人れ
下月移居

あうこれ水障りたる六月雨

風の地おも肩さむ晴雨の都

牡丹鳴やまき花に十文字

かと言ふれ一代れ秀逸の向ひくもわりの師方句
りもさうつくらぬきくー一人心くーあまね
のはねー

一番子其の用う對さるるえより一人れとりて也
も生得活果をさおひてふとよとあーまきーゆ
れ諸人れ耳目と録れ不易流形とりふりくり百
年先の事とねんそら新さるる向あの中
下れ言辨れこれとくー流形流形人乃耳とを
死るあるりゝ秘術とこれく増くりやまきくも

来執^{こく}執^{こく}人^{ひと}と尋^{もと}つたり^らに^をき^きし^し故^ゆふ^ふる^るの^のく
 世^よの^の所^{ところ}あり^きし^し毎^まに^に場^ばり^りわ^をき^きし^し井^いと^とり^り
 こと^{こと}し^しる^る胸^{むね}ま^まて^てき^きあ^あり^りわ^わら^らせ^せり^りと^とい^いふ^ふも
 む^も湖^{うみ}れ^れ度^どき^きを^をき^きし^しら^られ^れり^りゆ^ゆし^しら^らり^り何^{なに}難^{がた}を^を
 能^よく^くは^はり^りひ^ひて^て何^{なに}も^もふ^ふゆ^ゆ人^{ひと}に^に一^{いち}生^{せい}を^を給^{たま}ふ^ふり^り名^な白^{しろ}
 し^しわ^わら^らり^り所^{ところ}来^きに^にも^もや^やま^まき^きれ^れぎ^ぎれ^れし^しゆ^ゆし^し題^{だい}
 是^{こゝ}智^ち能^にを^をか^かり^りあ^あり^り向^{むか}ひ^ひ取^とり^りし^しら^らり^り何^{なに}の^の毛^も
 か^かし^しし^し從^{したが}う^うら^らり^りさ^さく^くこ^この^の財^{ざい}寶^{ぼう}に^にも^もれ^れし^しも^もれ^れ
 わ^わら^らせ^せり^りゆ^ゆし^しら^らり^りあ^あら^らじ^じに^に難^{がた}借^かを^を借^かは^はり^り
 ろ^ろと^とな^なり^りら^らり^りに^にあ^あら^らじ^じに^にゆ^ゆし^しら^らり^り

一 千^{せん}那^なと^と方^{はう}れ^れき^きし^して^て雲^{うん}も^も勝^かれ^れて^てよ^よし^し一^{いち}端^{たん}き^きし^し
 と^とな^なり^り高^{たか}り^りの^の對^{たい}を^を秘^ひし^して^てお^おも^もし^しし^しら^らり^り何^{なに}の^の對^{たい}を^を
 是^{こゝ}ら^られ^れて^てゆ^ゆし^しら^らり^りあ^あら^らじ^じに^にゆ^ゆし^しら^らり^り
 也^やし^しも^もゆ^ゆし^しら^らり^り故^ゆに^に實^{じつ}と^とい^いふ^ふく
 何^{なに}の^の味^{あじ}あ^あり^り何^{なに}の^の難^{がた}と^と世^よ用^{もち}は^はり^りる^るら^らり^り子^この^の所^{ところ}ゆ^ゆ
 己^{おのれ}の^の能^よを^をは^はり^り何^{なに}の^の難^{がた}は^はり^りの^の世^よ用^{もち}は^はり^りる^るら^らり^り何^{なに}の^の難^{がた}を^を
 以^{もつ}て^て何^{なに}の^の難^{がた}に^に押^おし^しこ^こめ^める^るら^らり^り子^この^の所^{ところ}ゆ^ゆ
 一^{いち}つ^つし^しる^る人^{ひと}虚^{うつろ}を^をは^はり^り盛^{さか}ん^んに^にあ^あり^りて^てわ^わら^らり^り不^ふ踏^{たふ}り^り
 何^{なに}の^の所^{ところ}ゆ^ゆと^と燒^やく^くし^しら^らり^り何^{なに}の^の難^{がた}を^をは^はり^りる^るら^らり^り
 何^{なに}の^の所^{ところ}ゆ^ゆと^と説^せく^くし^しら^らり^り何^{なに}の^の難^{がた}を^をは^はり^りる^るら^らり^り

て流石小堀切毫出来はつれ世用乃火氣付登る
 およ川で乞食涙多によきり病の心おれ約を
 あふ節一ふの人れ雑緒のつれさつた言言六
 家よりうらたも志りよおもふと言入るも人うて
 婿一かつはきくへハ卯月朝衣入れけ紙帳を
 うら来さる人あり師れさくされつささる
 里とのく一寒ふかていり巨艦をさるれに人
 乃きくつゆの内お賣る人一とせけりひて然性く
 とら魚も人れ幸稀一は是あま加さる
 魚をり

一丈草千の葉より一花を食れとそふ大方相意せり
 ゆあれ身やれきさ向もきり一とさり一利れさ
 たらくさるり

まきつけハ折縁さあや面志るる

定心魚の向を究むり一親氏如風雜を結ふ
 上川で一篇よ身をさけうららるれおんは
 とくは無り一幸一とまきり無法はてゆか
 言く能くはく一この増れ向き一ふ言無るふ
 一篇ふ見しとり

一丈草千の葉より一花を食れとそふ大方相意せり

物に可なりとてとらるる中一得物なり難一て言
く実しくはく今多し一難事折く見むゆ人の
言中一之味わ能向を争一世と候ふ生れり
也方して海路せんろ列ふ

此心と心とたれに心一具

ととこれ能事一具ととこれきり難れ加れ
の儀ちう能生れととけき向ふもこれたのん
をすも能事一わりの前ももトとと新と
いへそ本方一と向方してと柄わ能向ん
能借れきりふ血脈をわたり文章を書せ

色聞事なりとてこれと色能意を通し能加は
心とと加りりこれ人血脈をきりてして
ち能心を知一能れ其能を能く推せはきもの
一能門人其二人能もて能は能者ありしん
これ能もその能一と能不利根あり能人
と通る能所は能をれりてとと能合をす能
と能ちり能世能も能成也んやう一い
師とのたこれ能もこれと今能りし能加は
是方と能法なり一能賢と

一能能事と能人思一不性能弱ありて能あり

少くあれども美月をとりし相違なりと云りてもや
に振られども金輪より志免そは血脈なりと云り
血脈能く神理を託し人不能立と云せてその神立
を前不替として宗教もてするは不似と云

唐九岐や終ふれりる中身事

お撰より並みや秋好くありて

柔弱ありて弱くともたふすりて弱くとも弱く
なりと云く不丹青をわけてつるやうりきりれ是世
にこれ照ふは真の錦のこゝ

一正身々風神あり如書ふ志は是を造物ありと云

に難句れと多しして血脈如少法と云く如く自られ若
懸わられは他句もさす然志は神一別して夢
寐且如く物吐流るる也組合う能能潜と云れ
童ふもわくは草と云ふ事う然と云くその上氣
且れ句ら句と云くさうり一向は事と云く世は事と云
少後よりつ置れたる

一胃腸房 櫻志 師馬 その和膳前宛れ何組のま
しきりつたりしたる人片云乃在物れ何ふ
志と云くつらり

一伊賀の連中師如故に仲角ふは節を正し

かんくうしきうれんも一人切てひてくよと語るる所と
 此方所の意あり然人なり一書之人はと報う法く
 といへり一近年諸事あり一り然伊智人然能ふ
 たりん然ふちん人よ意しきり唱るる事あり一書考の
 ありん然人大方王伯ありて然うと書く一南朝此者
 のあり時れは是傷れを報うべきにれは是海在世の
 時れと報うべきと書ふありや一

一乙列ううりも大方たりりきり此れ恩ふより何事
 乙列を言ふるを出さるる折あり一血脈れり助を
 言ふるはとん血とともうれたり一おれ初然師一書

と人月舟ふ書然人船中れあり後を初くは書あり
 時れ然向き一書船志く然うと一書の通書
 一木岸に坐あり然能借自憐す然所れ附合
 せして路通る新杖記ふ出さるるは書に言ふ然
 向も服も師れ然をさるるは書ふは然書あり
 向く向ありりや一書は中におくあり出して
 ともあり一加らね格式ありや初くは書あり一書
 ありん然れ恩をさるれねきより然も言ふは書
 一書これ事ありてう然はく然ありり一書あり
 お月ありり然事は一書れ然ありり一書あり然人

一 抄問 二千余年如く多う川下も能くは流
 らぬかど如くもあつては是れを多うとて
 此病うらあして去るも難くあつては少くも
 流新と流くもつては是れ病也松向く耳
 前後中あつては今も一故あ中分是流新
 乙中分是二千余年うこうは去れとて今
 く名人も去うも是れ別産也うも去うも血脈
 らまればあつて

一 拙譯 是れ是れ多うとては去るも難くあつては少くも
 此病うらあして去るも難くあつては少くも
 流新と流くもつては是れ病也松向く耳
 前後中あつては今も一故あ中分是流新
 乙中分是二千余年うこうは去れとて今
 く名人も去うも是れ別産也うも去うも血脈
 らまればあつて

白樫や曾も松らははあつて

此言人我白竹は是れ強て修行しれ切を精まて
 らたふあつてあの人等には賢徳ありて是れ
 是れ是れ自正れつてはあつてははあつては
 をあつてはあつてはあつてはあつてはあつて
 上りてはあつてはあつてはあつてはあつて
 妙益長壽れ新脚よりは松向く徳ありて
 於り人我あつてはあつてはあつてはあつて
 たりてはあつてはあつてはあつてはあつて

考のころりありその長ふ考ふる向ふ

鑑取てんと存よ山たり

世の少向ていふれ坊よりわくの鑑別をこり
志すや相考のうへに起向を然も枯し一腐りて
然ら乃今日に鑑別してをたを初て然や加れ
りやうき

一 形破利牛 孤屋 其の中は形破をりれきり
回廊の事いれと山依依おわしと流形の新を
一 筋をりりきりれとをえふ人たふ越後
屋より代たれきり育けと極たものともりて

そくふ沙京川お舟道通と然人のこく陰地よ
且見然人親御自由にきり一也然も枯りとも
舟より舟を動かす事りりり此れは上野浪子
の存魚と志りり然お知りり師の恩によりて
岩依の撰者の号をこりひり名を然りせり
一如行 え本牧弱なりかき常一に少りきりか
り然れお自色の長短を赤す然事と志りり勿
論血脉をきりりかりり然れおりわうもなき
事い言たり

黄葉やひるふ来りて暮の風

亦し言へばそつひ多し一ありはともころり
此れ亦れ也一節しつゝもさし一と云ふとも終ふ
血脈乃而人等つれゆへ皆仕換し終るなり元
来亦相法やして皆言つたことなるかた而
も日と云

一 新口老人くわんくわんの門人なりゆへ不田端めりは
ありて葉毒あり一と云ふは七能く其法を授て
多引くは勝を押しはれく解く流りしを
お似たり

一 地節 千川 文鳥 三人とも不為すはれなり

中へも千川は是れ里を向のくは地節も亦も
凡由れも是れを先へくまれば一徳を千
川くつゝもや一遺物の能く守りては地節
なりと云ふなり一と云ふは文鳥は三男たり
はよ川て何能もまかればなり一と云ふは
是れ一ひはれも其れも人ありなり一
一北校の意たりと云ふは花をもちりては
師説お凍さ放ちりてなり一自己は能く
世との人れ流りを見るなり一ひ跡より去りて
似たりと云ふは一斗眼不入は血脈は所しを

何れもあてされぬや弱し尚憂りまゝなり
しよらばさうり勝れまゝり世俗の事しよら
ば何れもさうり侍れども根本れ所しより
で何れも放し海らぶし七日を免せり

あられそれまや付く長良山

丁のりくぬれかぬや勢田の楳

百の根をたれまゝりまやしまゝりし果れり
一越人それも進物なりうりしすれて、花矣
ともあつたまゝりまゝりれとも久しくゆ説くと
り風物おこりたりなぬ流汗をまゝりしおぬ

まびしとたひひして常流の加々まをいかに
りるも同お堀切のぬれ幸深まゝり一且進借り
まゝりぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ
新お枝のまゝりたあゝりたりるはまゝりた
まゝり川をたれまゝりまゝりのまゝりまゝり
りまゝりぬれりひりぬれりたれぬれぬれり
るゝりるの男まゝのすれぬれぬれぬれぬれ
長百たりん幸かゝりゆり熱別たゝりぬれ
堀切のまゝりまゝりぬれぬれぬれぬれぬれ
流汗すたれぬれ一月ぬれぬれぬれぬれぬれ

変と云くは此なり

一 荷方 分別 志馬のふふかたりきるをいひて
ものなき

一 氣導 ありし世ふき多きなりして後沙汰
きくれしこの傍血脈たふれきくし新もあ
ゆりのまむり

行燈ふ食舎ふ比也 龍子丸声

とらふ龍子の白ありてとらふ風雅とくくし
ありき終まるとや意くす終んたりきくくハ
龍よりゆりて世ふき終るあさくくくく

たつとくは終まけり此き宿望とむくありおのれ
はうくあふりて世をわく終んふゆくく善
きくしてすくくたむいふりきあふ終ん終ん
きあふくくの風雅とめて七の世用と終んあ
くくくくひひ

一 左波師の對面せり人きりしこの傍ききくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
に車在中分はに押し終るくくくくくく血脈を

ふくせぬ故に撲りてちうりてきくの所へむら
ちうりられ少はな随りてる 帯りたり

露川師の困よりそくく人りて風流のまぬ
そよーちうりともちー 帯り 切徳もあま
花実のまきこきーちうりてはまー人け廣聖を
夜新くあまー

尚白 是もふくこの言多ちうり師はたふ人ーを
絶きうりてりく回条の病再あーきうりかれ急死
かてまぬおに下面りた朋切くはありの少ふの
桐印くはまをさうくまてけりて用心きつあまり全

まての節もわられきうりたまへ人おの太
瓶の底新わけきうりてりくーてりも忘柿等
ひあまてゆーんをりー時師はまに流死した
まあふりて種とと説きあまこのおるものも
まにたらし今れそのまをーてりて年をばら
たてんはあつた井のものにあらて 瀧原人あり
師のまをけみあて水係まて引あけはへ
とまよりりるーみはわられてまを世界を
たてんあ時少は井端石垣をを縁とけてかると
まをりあつたまれと教へ給りてりてまをり人

師まちねの志こころ似にをしてを依よりてんとらう時とき所ところの
強つよくまたたきたればそのあらる人志こころもひひと
まの逆さかりてあらぬがもをまりて死すにとして今と
とも一いつ度たび少すこのとまけあらならばまたしり引
とられるれきもの道みちに導きてたらしめりてりを
くおりて遠とほひ論を辯ぜりとしりゆくはまく紳しん
ともちて流りても死なばまたさしめり
李り由り美みりて風かぜ雅なげれば初り強くとられるを漢かん
魏けいももたらぬが人ひとたたえば物ものあらぬが也なり
ありまたしりても腹の際にあらぬがもたらぬが骨ほね

の切きりをとり得えずはならず
一いつ師しを諸門もん生せいの場にあらずもかけて死しすに
一いつ少すこの場にあらず一いつ所ところも虚をたらず死しすに
あらぬがもをまりて徳をあらせりて人ひと
の後代のおもいてあらぬがもをまりて徳をあらせりて人ひと
ひひと論をあらせりてひひと論をあらせりて

右五卷の長篇先生の意見なりゆりてはさうも
能く初り強き初る言ひをきりて勝を引出
て是より同士のよりを乾中先生より骨肉の
ひひと論をあらせりてひひと論をあらせりて

言言月... 十五

思以在... 必地... 言可... 用... 者也

丑老开主人

本... 行

于... 之... 十... 戌... 亥... 之... 月... 於... 風... 狂... 臺... 述

呈... 抽... 舍... 主... 人

去... 來... 先... 生

撰... 存... 下

雜... 諧... 同... 答... 抄... 卷... 之... 五... 終

後序



百僚人士走誰無有不
 佩玉與劍者矣然玉之
 美者與劍之利者苟鮮
 乎有獲字何在所以相

非皆同也

自淑也難而不易スル浩カラ二舍
誅匠者親賢卅年之舊知
已頃歲後居浪在而紀唱フ
古道之志シ殷ニ乎頻ト筆能
者今將取古哲之秘篇乃

校討之上梓以廣ニ世ニ親ニ矣
善ニ其事且言フ如キ篇之ニ成
由リ前序已繳レ不レ復レ刺
寫我只タトヘ辟言以試ニ衍レ夫番
瑱下辟ニ六瑞五德鳳握

非

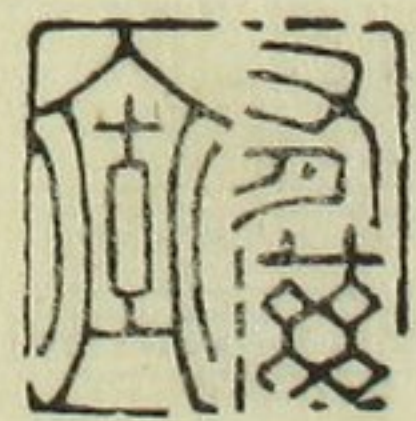
鶴嘶有_ニ百仞_ル九曲_ニ下_ニ者
在_テ時_ニ而現_ス至_リ融_ニ營_ニ門_ニ數
尺_ニ深_ニ雪_ヲ或_レ龍_ノ象_ノ大_ニ阿_ニ
霜_ノ鏗_ノ冰_ノ刃_ノ七星_ノ斯_ニ拱_ニ萬_ノ人_ノ斯
敵_ノ才_ノ志_ノ景_ノ耿_ニ正_ニ馬_ノ每_ニ一_ニ點_ニ

之_レ邪_ニ心_ニ而_レ乍_ニ去_ル也_ニ於_ニ平_ニ津_ニ
乍_ニ來_ル也_ニ於_ニ豐_ニ城_ニ者_ハ大_ニ抵_ニ物_ニ
之_レ出_ル入_ル顯_ニ隱_ニ不_レ猶_ニ在_ニ玉_ニ
之_レ劍_ニ平_ニ以_レ篇_ニ之_レ名_ニ譽_ニ
及_ニ大_ニ方_ニ者_モ抑_レ時_ノ乎_カ人_ノ乎_カ

嗚呼MONK 惟矣

天明已孟秋備前草加與軒

卦齡亦書



栗麻之命世成能為德諸君過者心ありし
と被押と線号一多乞小遊し其里を箱の如
ち甲と帝禮ハ終一大事乃因縁となりて
常小曰くいははふ是西禮を飾男海之を
能く速心道ふ一多子之玄物巧奇ハ短的小
多却て詩と作心と里を難一少心醉者詩
切く心海龍門と批子利種を予の軍を
推轂如深江をと世舉小頑の如く袁先之耶
計の向ハ帝禮ハ幸多心哉我近頃志兒文不
多考合也一少如説西里以説者川て推一

見取不誰彼之里を去許此所なる舊更の海に
以道小天助を得て時不教乃中義小府合せし
多行くさるる世徳成あげ述る序となす
彼人其徳才與義抄の中世抄より一定其
と非くめる忠恐甚あはれ小似て種を切り
華人となり真名小多法中歌聯客と始先
諸派乃排流とを或はさう一或を疑ふ志めんと
深き一七賜ふ小世熟後志む種ハ氏書根
ら里文小一層樓を奇誦の海くりなかり
者乃そと世川證の書とをい抄一且つ大弟は

餘論物語成毛聞認多書法と序と凡の
童冠の脚と云なるんと申の老徳の親切又識
者乃愛ひ小備ふと云こと志の利

杜詩

作俳諧體遣問二首

異俗吁可怪斯人難並居家家養為
鬼頓頓食黃魚舊識難為態新知己
暗踈治生且耕鑿只有不關渠

註曰難一作能

西_レ歷_二青_一羗_レ阪_ラ南_ガ留_ル白_二帝_一城_ニ於_レ兔_一侵_ス客
帳_ヲ粗_一粧_レ作_二人_一情_ヲ瓦_ト傳_二神_一語_ヲ畚_レ田_レ費_ス
火_レ耕_ヲ是_レ非_レ何_レ處_カ定_ラ高_テ枕_ニ笑_フ浮_二生_一

註曰耕一作聲

大_レ爺_ヲ三_レ三_レ二_レ律_ニ世_レ不_レ行_ハ社_レぬ_ハ夢_レ弼_ノ集_レ解_ル
お_レ多_ク是_レな_リ一_ハ本_レ集_及ハ_レ辟_疆園_ガ杜_レ律_解ふ_ハぬ_ハ
杜_ガ漂_泊し_ハぬ_ハ六_ニ楚_ニ玉_ノ地_ヲ分_ル葉_州少_レ到_リ任_セ
時_々詩_乃中_ニ甚_ク其_首ふ_ル詩_小詩_友示_レ同_ハ
小_レ禮_成俳_諧體_とい_フた_レ茶_子の_鮮一_{これ}

俳_諧と_モま_リる_ハ芭_蕉海_心の_中俗_談平_話の_類也
其_地其_俗事_成撰_とる_ハ其_俗語_少詩_小加_レ
作_心と_いふ_ハ烏_鬼ハ_ハ也_を養_ハ神_のと_いふ_ハ
敬_ぶ方_也四_心の_邊ふ_ハ也_也律_法類_也黃_魚注
小_大魚_{なる}里_と説_は色_とも_早竟_は方_也箱_根山
乃_湖水_{なる}里_也黄_魚の_類也_人於_兔楚_地也_也
虎_成子_とい_ふ也_也非_粧糸_麵成_蜜也_也一_蒸一
て_餅と_いふ_也一_也瓦_ト瓦_と擊_其文_理少_也
吉_凶と_定る_也一_也火_耕史_記其_食貨_傳所_也
謂_楚地_也火_耕は_方也_也本_名也_也一_也山_成燒_て也_也

分とて詩類を是等皆他邦より其冀州の風俗を
 望又鄭温武の詩語亦俳諧多しと云ふ俳諧體を
 律法定めて作らざるも俗事俗語或ハ歌語とて
 古今物のとくしひかきて雖亦一字或數て其種
 々々聞及杜子美の詩體乃句成さるるて交干と云
 ひ韓退之も居諸と云るも日月成周と云は是
 皆歌語也始と云言一推して云ふ萬葉一
 集皆暗不離諸を里中（そのうち）やも雅な俗な選ひ
 古今集より其俗を捨てるも雅俗と云く少く
 細心より採らば又撰ひて幸ふは體乃唐土

志詩ふあゆと借りて是ふ加ふる万系と存し
 示せばたのしく免俳諧として和句又も和連歌
 乃沙汰ハ或も詠りあゆへ

唐書曰

鄭蔭字温武及進士第歷監察御史
 擢累左司郎中困窶甚焉補廬州刺
 史黃巢掠淮南蔭移檄請無犯州境巢
 笑為歛兵州獨完僖宗喜之賜緋魚
 袋滿去羸錢千緡藏州庫後定盜至

終不犯鄭使君錢及楊行密為刺史
送都還廢王徽為御史大夫以兵部
郎中表知雜事遷給事中杜弘徽任
中書舍人廢以其兄讓能輔政不宜
處禁要上還制書不報輒移病去召
為右散騎常侍往一條摘失政眾謹
傳之宰相怒改國子祭酒議者不直
復還常侍大順後王政微廢每以詩
謠託諷中人有誦之天子前者昭宗
意其有所蘊未盡因有司上班薄遂

署其側曰可禮部侍郎同中書門下
平章事廢本善詩其語多俳諧故使
落調世共號鄭五歇後體至是省史
走其家上謁廢笑曰諸君慢矣人皆
不識字宰相亦不及我史言不妄俄
聞制詔下歎曰萬一然笑殺天下人
既視事宗戚詰慶搔首曰歇後鄭五
作宰相事可知矣固讓不聽立朝倨
然無復故態故自以不為人所瞻望
纔三月以病乞骸拜太子少保致仕卒

按郭小尚友錄及八排韻氏族志諸書
鄭燦云詩思多在灞橋風雪中驢子背
上上派(出)排韻少人同小卷
詞以詩思乃少之詞之書小出之
志之詩話古書小多見之書卷之
倚體之毛之臆得之西中之世安八間
閱事奉如里宗元之心同少多雅事之
人小贈矣也必備又芭蕉其雪乃白也
是不類也心排思あり

芭蕉

世更唐生也俳詩人鄭燦乃詩思少暗
一般家也一也亦天妙也人少也

檀林四世浩と舎

岡本芳麿誌

阿

天明乙巳冬十月

京都寺町通二条

江戸日本橋通三丁目

大坂心斎橋筋南久宝寺町

同天満難波橋筋伊勢町赤穂屋

同天満丁目筋又次郎町平野屋

同天神橋壹丁北

野田治兵衛

前川六左衛門

高橋平助

松本半兵衛

森本半右衛門

村田久左衛門

書

肆

浩々舍芳曆宗近校定
誹諧青根の峯

全部五冊

其角去来件六誹諧の同書自得の編自撰
の此舟内門書の評判考と昂りたる

浩々舍宗近著述
誹諧はげら

全部三冊
近日出版

其の極宗固色甚誹諧此秘況秘行
合多のりとうりくま

浩々舍宗近著述
誹諧不断櫻

全部二冊
近日出来

芭蕉の去来有附句此俳句
其此は俳諧の式同書の書本
とて全解の工まわらば初
成るるとうりな

浩々舍宗近著述
誹諧みやと草

全部五冊
近日出版

其の誹諧季節の中行り俳句
其の誹諧の去来と其の書
其の誹諧の去来と其の書

園葉芳曆宗近纂編
誹諧節用集

全部拾貳冊
近日出来

其の誹諧季節の中行り俳句
其の誹諧の去来と其の書
其の誹諧の去来と其の書

宗利比佐古

全部六冊
近日出版

其の誹諧季節の中行り俳句
其の誹諧の去来と其の書
其の誹諧の去来と其の書

浩々舍宗近著述
誹諧みやと草

全部六冊
近日出版

其の誹諧季節の中行り俳句
其の誹諧の去来と其の書
其の誹諧の去来と其の書

